

日本山岳会への提言

パイオニアワーク

「創造的登山」と日本の登山界

本多勝一

高齢化、若年層の未組織化など、日本山岳会がかかえる問題の多くは、日本の登山界と共通したものである。そこで今後の日本の登山界を俯瞰するうえで、山岳会の現状に焦点を当てて、問題点を明らかにしてみようと思う。

日本山岳会の「会報」としての本誌の編集長・神長幹雄氏から提言された主題は、日本山岳会の原点と現状の登山界の乖離にかかわる問題のひとつ「パイオニアワークと日本の登山界」です。ここで「パイオニアワーク」という言葉が使われたのは、私にとって初めての論文でもある「創造的登山と

は何か」を下敷きにしているからであつて、今から52年前の学生時代にこれを書いた1955年当時の登山界を反映してもいます。詳細は拙著「旅立ちの記」(朝日新聞社「本多勝一集」第2巻)に収録されたAとBによる対話形式のこの論文の解説のとおりですが、論文の終わり近くに次のような部分

があります。

「B ……君は未踏峰未踏峰というが(注)、エベレスト以下主な八〇〇〇メートル級は、一四座のうち七座がこの夏(一九五五年)までに陥落している。なるほど低い未踏峰はまだたくさんあるが、それでは大したパイオニアワークとは言えなくなりはないか。

A 君にしちゃあ初めて核心を突く質問をしたね。実はそれこそ、チョモランマ登頂の報が伝わった時に岳人たちの受けたショックの正体だ。「ついにエベレストが陥落したのだ。失望落胆やる方なし。私はこの晩をけつして忘れないだろう——川喜田二郎『ネパール王国探検記』」ショックを受けなかつたなどと言つてる連中は、うそつきでなければ最初からパイオニア

精神が無かつたのだ」

ここで「日本山岳会の原点」(神長氏)にたちかえってみますと、当時は「日本」のつかない「山岳会」ですが、設立に中心的役割をはたした小島鳥水(久太)の著書「日本アルプス」(前川文栄閣・明治43年)の序文に次のような言葉があります。すなわち日本列島の大部分が「山といふ土地の屋棟」だとしたあとに、その中でも「最も高く、最も長く、最も大きく、最も秘密を蔵し、最も複雑に構造されてゐるものは『日本アルプス』の名で括られる甲斐・信濃・飛騨・越中・越後などの、本州中央大山系である、これ等の山々は、今までの地図の殆ど凡べてに、空白であつたやうに、人々の心にも、永久の空虚を残してゐたのでは、無



1955年ごろ、激論が10時すぎまで続いた京大山岳部の部室にて

かつたらうか」

すなわち小島鳥水は、日本の「空白」地帯に注目しています。このころは日本アルプス最高峰の北岳も、古くから頂上に「日の神」の祠があったものの、冬期は1925（大正14）年の西堀栄三郎らによるものが初登頂でした。

なぜここで私が「空白」をとりあげたかといえば、そこには川喜田二郎の受けたショックに通ずる

ものがあるからです。小島鳥水をとらえた動機の大きな部分に「空白」地帯があった。ということとは、日本山岳会設立の当初から空白地帯たる未踏峰への欲求——創造的行為——が大きな動機だったことにはかなりません。当時もし北岳その他の高峰が現在と同じように大衆化なり俗化なりしていたら、鳥水がそのような欲求を抱いたとは考えられぬことです。それはも

う創造的登山ではないのですから。こんなことは分かりきった指摘にすぎません。しかし、「創造的登山とは何か」を書いた1955年当時は、必ずしも分かりきったことではありませんでした。このころ私たちの大学山岳部では現役学生によるヒマラヤ遠征が大いに議論されていたのですが、若手OBからはそれに強く反対する圧力があがり、激論はついに折り合うことがないまま、現役の中で海外遠征を實行したい私たち10人ほどは、若手OBよりさらに上の世代（今西錦司・梅棹忠夫など）の支持を得て山岳部から独立し、探検部を創設するに到ります。1956年に創設するや、その年のうちに2つの現役隊がパキスタンやイランへ出かけました。海外渡航の自由化以前ですから、当時としては画期的です。

この7年後にあたる1963年私は「創造的登山とは何か」の続編ともいえる「山は死んだ」を発表します。これはいくつかの遭難事件取材を契機に書いたのですが、要するにそれ以前のような登山界への訣別の章でした。あれからすでに44年。この論文で示された見

「平山氏や山野井氏のようなスーパーアスターを持ち出さなくても、昔では考えられなかったような登山は多い。たとえば、ゴルジュ突破って何？ いちばん昔の山登りの面影を残しているのは沢登りの世界で、最大の課題が詰め上がったホテルが建っている沢のゴルジュの通過とは？（中略）何でこうなったのか、という道筋は、ともかく自分がかつて夢を抱いた登山の世界のことなのだから、押さえておいたほうがよい」

そこで拙著「山を考える」（実業之日本社・1966年）現在には朝日文庫「収録の一文「山は死んだ」（1963年・『文芸朝日』4月号）

から引用されて——「登山界がこのようなに奇形化し、分化し、老衰期にはいったのは、なぜだろうか。それはエベレストが処女峰でなくなったからである」

そして福島氏は、これを「今になってみると実に腑に落ちる論理」とし、たとえば「なぜ、最高の才能をもつクライマーの目標がエルキャピタンのフリークライミングなのか。——エベレストが処女峰でなくなったからである、といった具合に」と応用します。

さらに福島氏は、拙論の予見について「この四十年ほどの登山界を、これほど適切に表現した文章は、まずほかにないだろう」として、拙著を要約します。未踏峰はまだたくさんあるにもかかわらず、エベレスト初登頂を超えるような偉業はもはや地球上に存在しないこと、自分が身をおく世界から最高のものがすでに失われているのは、さびしいものであること、「山男の悲劇は、最終的にはここにあり」ことなど。

神長氏が提言された主題「日本山岳会の原点と現状の登山界の乖離」は、福島氏の要約の最後から引用すれば、世界の登山界は「エ

ベレスト(登頂)を頂点として老衰期に入った。これからは登山がそういう世界であることをよく認識し、平和な「死期」が来るのを待つことだ。その後、登山界は本当の革命を遂げ、近代アルピニズムは真のスポーツに生まれ変わるだろう……」と予見されている。

となりますと、日本山岳会の現状は、まだ旧時代の価値観を引きずっているのではないかと疑うものであります。年報の「山岳」を見ても、そう思わせられるのです。むしろ日本勤労者山岳連盟が出している月刊の機関誌「登山時報」の方が、右にいう「本当の革命を遂げ」た点で「真のスポーツに生まれ変わ」っているのかもしれない。福島氏は最後にこう書きます。

——「平山氏のフリークライミングや山野井氏のヒマラヤ・アルパインスタイルを伝え聞いて、あらためて登山界は一度死を通過したのだと思う。そして、現在のクライミングが古典的登山のエッセンスを遺伝子のように残しつつ、新しいスポーツとして再生したことを示しているのなら、登山の混乱の時代を生き延びてきたばかりも、今、かつての老衰期の時代の登山

にきつぱりと見切りをつけられるというものだ」

さらに加えるなら、真のスポーツとしてあるていど生まれ変わった例は、公刊されている定期刊行誌としては前述の機関誌「登山時報」に出ているような登山なものではないか。それを思わせるような登山報告を、手元にある去年の同誌目次の中から以下にいくつか拾ってみましょう。

- ▽中高年のためのネパールトレッキング案内「ヤラ」(二月号)
- ▽不思議を発見する山歩き「東赤石岳」(二月号)
- ▽気象情報の見方と使い方——春のハイキング(三月号)
- ▽南アルプスの静寂を求めて(四月号)
- ▽改正保険業法への対応は(五月号)
- ▽大日岳訴訟——第一審を勝訴(六月号)
- ▽ライチョウ目撃情報ネットワークの構築へ(一〇月号)
- ▽心拍計を使ってゆとりのある登山を(一二月号)
- ▽東日本女性登山交流会に寄せて(同)
- ▽登山のためのキネシオテーピン

グ講座(同)

もちろんこうした傾向とは別に、遭難の分析や海外登山報告もありますが、それらにしても基本姿勢が従来の一般的山岳雑誌とは異なるといえます。

すなわちここには、すでに「スポーツに生まれ変わった側面がかなりみられるのではないだろうか。今後この傾向はいっそうすすんでゆくと思われます。

けれども、最近しばしば見られる登り方の中に、たとえば「100名山早まわり競争」とか、富士山なり北岳なりにひたすら短時間で往復する競争とか、要するにマラソンを山にもちこんだ類のものがあります。これには賛成しかねるのです。山を舞台とするスポーツ化は、やはりグラウンドや体育館での陸上競技とは違って、大自然に抱かれてのスポーツです。そこから多くを学ぶこと自体がスポーツの中に含まれる。まさに総合的スポーツだと思えます。

〔注〕原文は「処女峰処女峰というが」でしたが、処女峰という表現には抵抗を感じる人々が特に女性に多いようなので、引用文以外では「未踏峰」と変更しました。